

しめのひとこと

志免町のいろんなひと、いろんなことをお伝えします！

33

困っているといえる 社会を目指す

志免の元気印が笑顔をつなぐ

志免町社会福祉協議会理事
元人権擁護委員

やまさき ちえ
山崎 知恵

香川県高松市出身。地元の洋裁関係の学校を卒業後、勉学のために叔父の暮らしていた福岡へ。結婚後に志免町へ引っ越し、40年以上経つ。2012年～2021年まで法務省より委嘱された人権擁護委員を務めた。その他、PTA活動では広報委員として動き、現在はその経験も活かしながら志免町社会福祉協議会の広報部会で誌面づくりに携わっている。



誰かが困るのは嫌だから 自分ができることで補いたい

声をかけられたら喜んでというのが私の信念です。声をかけてくださった方の気持ちを大事にしたから「喜んで」という思いで引き受けています。

PTAの役員など、なり手がなくて困ることも多いですが、だからといって「あみだくじで決めましょう」とするのは嫌なので、場がシーンとなったら「はい、私がやります」と手を挙げます。

幼少のころからこういう性格でした。幼稚園のお遊戯会では、自分のパートだけでなく他の子のパートも全部覚えて、もし休んだ子がいたら代わりにそのパートは全部入っていましたね。当時から「誰かが困るのは嫌だな」という思いがあって、空きパートがあると先生が困る、それなら代わりに私ができるように他のパートも覚えようという感じでした。

そのころから人が好きで、頼まれると「喜んで」という氣勢が自然に確立したものになっていったのでしょうかね。



太陽に向かって咲くひまわりの ように！いつも笑顔で、元気に

私がいるところでは皆さんに笑顔でいてほしいと思っています。相手の喜ぶ様子、特に笑顔が好きですね。自分も笑顔じゃないと相手も笑顔にならないと思っているので、体調を良くすること、いつも笑顔でいることを心がけています。自分にとっては当たり前のことなので特に無理はしていません。自然にできているのは有難いですね。

以前は介護老人保健施設に勤めていました。人が好きだし、お世話をするのも好きなので、介護職はとても自分に向いている仕事だと思いました。その施設で働きながら介護福祉士の資格を取りました。

入社ときには「太陽に向かって咲くひまわりのように、元気印の山崎です。皆さん、よろしくです」と挨拶しました。それを覚えてくださった方もいて「あなたがいると元気になる」という言葉もいただきました。



▲いきいきサロンの集まりで
7月恒例のスイカ割りを楽しみます

気忙しいと思われないように ゆったり構えて、心の中で走って

何事も前向きでないと進まないと考えています。もちろん落ち込むこともあります。そこからどれだけの速さで上を向くか。自分の人生は一度しかないから、時間を大切にしたいですね。今日（取材の日）もこんな良い機会をいただいて、心がわくわくしています。

「忙しいのにすみません」と言われたら「いいよ。全然楽しんでるよ。忙しいのは皆同じで当たり前だから。今日を楽しんでね」と伝えていきます。たとえ頭と体はフル回転していても、笑顔で接することを心がけていますね。心の中では走っているかもしれないけれど…(笑)。

子どもにも高齢者にも人権がある 人の尊厳を守ってほしい

子育てをしながら仕事をしていましたが、子どもが小さいときから「お母ちゃん、あのね」という呼びかけには「今料理して忙しいから向こうに行ってなさい」などと言わず、その場で向き合うようにしていました。この子の「あのね」は今しかないと思いついて料理する手を止めて、子どもと目線を合わせながら「どうした?」「それは良かったね」と必ず返事をしました。

言われた人がどう思うか、その言葉に傷つかないだろうかと常に考え、自分が言われたくないこと

は、相手に対しても絶対に言わないようにしています。それは子どもに対しても同じです。子どもにも人権があります。志免町には子どもの権利条例もあるので、生まれたときから一人ひとりに人権があるんだよということ、もっとたくさんの人に意識してほしいですね。

また、高齢者や認知症の方の人権や尊厳も大切にしてほしいと考えています。誰も下の世話はしてほしくない、お食事の介助をしてほしくない、洋服を着替えるのも、お風呂に入るのも全て自分でしたいはず。私も最後の日まで自分でしたいと思います。でも、やがて自分ではできなくなっていく。

認知症の方には、その方の生きてきた歴史があり生活歴もあります。それを認め受け止めて、そこに尊厳を持たないといけなと考えています。

本当に困っている人が声を上げる ことができる社会を目指して

人の世話になりたくないから困っていると言えない、相談しづらい高齢者の方も多いと思います。何かお役に立つことをしたいですね。

認知症で困っている人は志免町にもたくさんいらっしゃるでしょう。あるいは病気であることを隠している、また身内にいらっしゃる方もいるでしょう。本当に困っている人がもっと気楽に「困っちゃっね」と言うことのできる社会になってほしいですね。

取材を終えて

面倒だと思われることを喜んで引き受けるという山崎さんの姿勢は、困っている人にこそ寄り添うというボランティアの本質に触れた気がしました。

そして「面倒くさい」という言葉が、志免町で最も似合わない人なのだと思います。

